

## 『 今を生きる人々との出会い 』

－ ケニア沿岸のマングローブプロジェクト体験報告 －

坂入 亮太\*1)

### 1. 応募から参加決定まで

年度末のある日、担任しているクラスの保護者の方から1通の手紙をいただいた。内容は私に紹介したい記事があるとのこと。新聞の切り抜きにはフェロー応募の内容が示されていた。かねてから海外でのボランティア、とりわけ途上国への支援に興味をもっていた私は、ホームページで募集要項を確認し、職場の校長に許可を得たうえですぐに応募することを決めた。

その場で小論文のテーマを確認してはいたものの日々の仕事に取り紛れてなかなか書き進めることなく日が過ぎていき、気付けば締め切り間近。慌てて書き上げて提出した小論文はやはり次点。今回は自分の時間管理の甘さを反省し、参加を諦めていた。

ところが、校長にも落選を報告した来年と思っていたところへ辞退者が出たとの知らせが届き、迷わず参加を決意する。場所は東アフリカ・ケニア共和国。学生時代からの夢に近づいたようで、一人でうきうきうかれてしまう。



〈オフに訪れた海・目の前の大自然に圧倒される〉

### 2. 事前準備

#### ○ 航空券の手配

慣れないアフリカへの渡航で苦戦する。知人の勤める旅行会社に手配を依頼するも、ちょうどお

盆の時期と重なり成田発のドバイ経由はほぼ満席でキャンセル待ちもできない。香港・南アフリカ経由、ムンバイ経由の便など、少しでも安価な航空券を探してはみたが、治安面の問題や渡航直前に起きたムンバイでのテロなどを考慮し、結局とても高価なアムステルダム経由を選択する。後にボランティアメンバーから「何故ドバイから来ない？」と呆れられることに。しかし、日本への帰り道、同じチームに参加していたオランダ人教師 Karina とアムステルダムで観光できるというおまけがついた。ケガの功名。朝から出発までの半日、お互いの考えなどを交換できる貴重な時間となる。



〈フィールドサイトで・中央で座るのが Karina〉

#### ○ 予防接種

まずは横浜でアフリカ関連の予防接種を受けられる機関を探す。出身地東京の予防医学協会に問い合わせると、神奈川県予防医学協会、パスポートセンターと電話をつなぎ、検疫衛生協会を紹介してもらい、早速予約の電話。まずは接種内容について相談をとのことなので、仕事の日程を調整して手続きへ。その場で細かな接種予定を立ててもらい、黄熱病予防接種の仮予約。黄熱病の予防接種は一度受けると1ヶ月は他の接種を受けられないため最後に。初日はA型肝炎と狂犬病の1回目も受ける。事前に事務局から知らせていただいた内容から、今回は黄熱病、A型肝炎、狂犬病、破傷風の4種、計6本の予防接種を受ける

ことにした。その他にも心配な病気はあったが、腸チフスは国内での接種が不可能、マラリアは経口薬を現地で調達するよう（蚊に刺されない工夫をすることが最も有効と）指導される。ポリオについては黄熱病との同時接種ができないため、生ものを口にしないよう注意を受け接種はしなかった。

予防接種に伴う副作用は黄熱病の接種後に最も強く感じた。手足のしびれ、めまい、眠気などで、仕事をするのが辛い日も。

また、このために休暇をとって職場を離れなければならなかったことが痛い。クラスの子どもたち、職場の仲間に申し訳なかった。

### ○ 装備

事務局から知らせていただいたアフリカへの渡航経験者の方にメールを送り、教えていただいた内容と送られてきた資料の内容から必要な装備をそろえる。

- ・ 蚊帳（（株）住化ライフテックより購入）
- ・ 虫除けスプレー・蚊取り線香
- ・ マリンブーツ
- ・ サングラス
- ・ 帽子
- ・ ヘッドライト
- ・ 日焼け止め
- ・ 常備薬（下痢止め・抗生物質など）
- ・ レインジャケット
- ・ 長そでシャツ・長ズボン
- ・ 装備を包むビニール袋

持っていったもので特に役立ったものはレインジャケットと帽子、ビニール袋。乾季にも関わらず活動中は連日雨が降り、フィールドサイトで雨宿りをしながらの活動となったため、雨対策の装備をよく活用した。

逆に、蚊帳は一度も封を開けることなく帰国した。滞在場所には蚊帳が用意されていたので、あくまでも非常用と考えればよいかと後に思う。（マラリア予防を優先と考え、わざわざ殺虫剤を練り込んである特別なものを注文したのだが使うことはなかった。）

最終日に個人で宿泊したホテルは空調完備だ

ったので、ここでも蚊帳は必要なかった。



〈活動初日から泥の中を歩く・十分な装備が必要〉

### ○ ビザ申請

ケニア大使館の所在は東京・自由が丘。観光ビザは申請の翌日午後以降発行となる。申請受付は午前中のみ。郵送でも申請と受け取りが可能だが、渡航直前にパスポートや重要書類の紛失を避け、直接大使館へ申請しに行くことに。やはり平日仕事を休む必要があったがやむを得ず。申請書とその記入例は大使館のホームページから落とし、顔写真を用意して申請へ。金額は6,000円。

しかし、実際には空港でも簡単にビザの取得が可能だった。同じ便でケニアに到着した旅行者の多くは、入国時にビザ申請していた。手続きに必要な書類さえそろえておけば、空港での申請が最も簡単のように思う。



〈村の学校・元気な子どもたちの声が響く〉

### ○ リスクマネジメント

事前の情報ではケニアの治安は悪化しているとのこと。通常の海外旅行と同様かそれ以上の危機管理が必要と考えた。まず、金品は分散して身につけること。旅券とそのコピーも同様。現地で

は写真撮影が困難な場合がほとんどなので、顔写真も複数枚用意し、万が一旅券を紛失した場合に備えた。



〈Gazi への入口〉

病気に関しては特にマラリア予防のため、徹底的に蚊に刺されない工夫をする。夕方以降は肌の露出を避け、手首や足首、首、耳など、どうしても露出する部分には虫除けを塗った。就寝時は蚊取り線香を蚊帳の中で炊き、長袖長ズボンのままで眠った。経口薬は結局買いに行く時間もなくて、さらに副作用も心配だったので飲まなかった。毎日の習慣として虫除け対策をすることで、帰国まで一度も蚊に刺されることなく過ごすことができた。

また、電話線のない場所への渡航ということで、現地で使用できる携帯電話をレンタルした。手配は旅行会社から FAX で。申し込み後すぐに確認の電話が鳴り、出発二日前の夕方に番号を通知してもらい、前日午前中の配達で受け取り。滞在した村でも問題なく使用でき、おかげで本国との連絡もスムーズに行うことができた。



〈街の喧噪・フェリー乗り場は常に渋滞する〉

### 3. 日程の概要（時刻は全て現地時間）

#### 【往路】

##### 〈行程 1〉

搭乗地 Tokyo (Narita Airport)

目的地 Amsterdam (アムステルダム) (Schiphol)

フライト番号 KL0862

出発時刻

11:30 2006 8月7日 (月)

到着時刻

16:20 2006 8月7日 (月)

##### 〈行程 2〉

搭乗地 Amsterdam (アムステルダム) (Schiphol)

目的地 Nairobi (ナイロビ) (Nairobi)

フライト番号 KL4341

出発時刻

21:05 2006 8月7日 (月)

到着時刻

06:30 2006 8月8日 (火)

備考: Kenya Airways コードシェア運航便

##### 〈行程 3〉

搭乗地 Nairobi (ナイロビ) (Nairobi)

目的地 Mombasa (モンバサ) (Mombasa)

フライト番号 KQ0606

出発時刻

11:15 2006 8月8日 (火)

到着時刻

12:15 2006 8月8日 (火)

備考: ケニアーモンバサ間は同行の長濱さんと同じ便 → タクシーでホテルへ移動

#### 【現地活動】

活動場所: Gazi Bay (Mombasa, Kenya)



〈Gazi・道行く人みなで“Jambo!”とあいさつ〉

8月8日 (火)



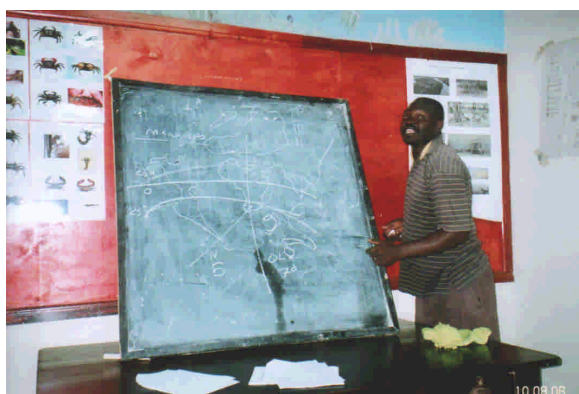
- ・ Hotel “Excellent” にてチームに合流
- ・ 乗り合いバス「マタツ」で滞在場所へ移動
- ・ 宿泊場所にて荷解き
- ・ ミーティング（各自簡単なスピーチ）



〈ボランティアトークでは自国の紹介をする〉

8月9日（水）

- ・ Dr. カイロ（現地研究者）の講義



〈ラボで講義する Dr. カイロ〉

- ・ マングローブマラソン



〈Gazi 周辺のマングローブ〉

8月10日（木）-8月11日（金）

- ・ マングローブ林にて生態系調査
- ・ ラボにてサンプルのデータ収集・解析



〈現地の学生たち〉

- ・ 歓迎会（8月10日・夜）

8月12日（土）-8月13日（日）

- ・ 苗木の運搬
- ・ マングローブの植林



〈手作りのプロットに植林する〉

- ・ Village Lunch（8月13日・昼）



〈イスラム式の昼食パーティーを開いてもらう〉

- ・ Village Dinner（8月13日・夜）

8月14日（月）

- ・ オフ（観光地 “Kisite”）

8月15日（火）-8月17日（木）

- ・ マングローブ林にて生態系調査
- ・ ラボにてサンプルのデータ収集・解析
- ・ 学校訪問（8月15日・タ）
- ・ Village Football（8月16日・タ）

8月18日（金）

- ・ 荷造り
- ・ 乗り合いバス「マタツ」で解散場所へ移動

#### 【復路】

8月18日（金） モンバサ泊

滞在先：Hotel “Royal Castle”

Tel +254-(0)41-2220373

#### 〈行程1〉

搭乗地 Mombasa（モンバサ）(Mombasa)

目的地 Nairobi（ナイロビ）(Nairobi)

フライト番号 KQ0617

出発時刻

07:30 2006 8月19日（土）

08:30 2006 8月19日（土）

#### 〈行程2〉

搭乗地 Nairobi（ナイロビ）(Nairobi)

目的地 Amsterdam（アムステルダム）(Schiphol)

フライト番号 KL4340

出発時刻

11:10 2006 8月19日（土）

19:10 2006 8月19日（土）

備考：Kenya Airways コードシェア運航便

8月19日（土） アムステルダム泊

滞在先：NH Schiphol Airport

Tel +31-(0)20-6550550

#### 〈行程3〉

搭乗地 Amsterdam（アムステルダム）(Schiphol)

目的地 Tokyo（Narita Airport）

フライト番号 KL0861

出発時刻

15:20 2006 8月20日（日）

到着時刻

09:40 2006 8月21日（月）

#### 4. 活動の概要

#### (1) 生態系についての講義

初日より研究者の方がマングローブを取り巻く生態系について教えてくれる。当然のことながら英語。専門用語も多く、理解するというより聞き取るのがやっとなので、メモを頼りに辞書を引き、ようやく概略をつかめるという感じ。熱帯雨林、珊瑚礁について3番目に大きな生態系をマングローブがつくっていること、マングローブの種だけでもたくさんのもがあり、活動場所周辺にはそのうちの数種が植えられていることなどを教えてもらう。



〈10年前、旧珊瑚礁に植林されたマングローブ林〉

#### (2) マングローブマラソン

活動初日に行われたマングローブ林の視察。滞在先より歩いて向かう。平原の中に林立するマングローブの見学から始まり、徐々に森の奥へ。場所によっては膝まで泥に埋まりながらの行進。何度も足をとられ、土中の根で足を切ったり、幹についた牡蠣ガラで手を切ったりするメンバーも。今回は裸までのスポーツ用アクアソックスで参加したが、それでは何度も泥の中に靴をとられてしまう。足首までカバーできるブーツタイプのものが最も使える。手袋も用意すべきだったと後悔。メンバーの中にはしっかりそのような準備をしてきた方もいて感嘆。安全管理は大切と改めて思う。ケガの予防も。今回の見学で傷を負ったメンバーは化膿してしまうなど、後処理も大変だった。

#### (3) ボランティアトーク

ボランティアメンバーで本国の文化を紹介するスピーチを、毎晩交代で行う。国の成り



立ちや文化の紹介、家族の話や飼っている犬の話など内容は様々。私は、運動会に向けてクラスの子どもたちと練習していたソーラン節を披露。音楽は携帯プレーヤーの音源を現地のラジオで拾って流し、みんなにかけ声をかけてもらいながら踊った。「どっこいしょ！」のかけ声がみんなに気に入ってもらえたらしく、ことあるごとにメンバーが「どっこいしょ！ どっこいしょ！」とかけ声をかけてくれる。

#### (4) 生態系調査（サンプル収集）

主に午前中に行う。

数年前より実験用に植林したフィールドサイトが隣村にあり、そこでサンプルの収集を行った。



〈各プロットで苗の成長の程度を計測する〉



〈葉の大きさの計測〉

実際には、マングローブ林に生息するカニ（彼らが掘った穴の数）や貝の数を数えたり、幹の太さや高さを測ったり、新しく顔を出している根を数えたり大きさを測ったり、葉の

枚数を数えたり大きさを測ったりとそれぞれ分担。



〈プロット内の土をサンプルとして採取する〉

土中の酸素濃度の計測や土のサンプル収集、葉や根のサンプル、時には1本の苗木丸ごとをサンプルとして持ち帰ることも。持ち帰る苗木が植えられていたプロット内の土を1m強の深さまで掘り返し、手作業で土中の根をていねいに取り出して持ち帰った。



〈土中の根をひとつずつ採取する〉



〈生育条件をコントロールされたプロット〉

#### (5) データ収集・解析

主に午後に行く。

現地研究所にて持ち帰ったサンプルの計量を行い、乾燥させる準備をする。研究者の説明によると、炭素量を計測するために水分を蒸発させるとのこと。また、前日に乾燥させたサンプルの計量を行ったり、得られたデータをパソコンに入力したりといった作業を分担して行う。



〈採取したサンプルを乾燥させる装置〉

#### (6) 植林

海岸に準備された植林用のスペースにプロットをつくり、事前に育ててあった苗木を植える作業を行う。測量、苗木の運搬、植林と全て手作業で分担。麻のロープと木の枝を使って等間隔に印を打ち、苗を植える準備をする。きれいに整頓されて植えられた苗木の生長を部分ごとに計測するため。



〈苗木を育てている“nursery”〉

海岸で半分水に浸かりながらの作業。特に苗木の運搬はかなりの重労働。苗木を育てている場所はかなりの広範囲に渡り、しかも干

潮時には水路を使うことができないため、ストレッチャーで苗木を持って車まで運び、車でプロット近くの海岸まで、そこからさらにストレッチャーでプロットまで運ぶというリレー方式。ストレッチャーはもちろん手作り。使い古した穀物用の袋に細い丸太を縛り付けて作った。



〈干潮時には分散して植えてある苗木が顔を出す〉

#### (7) 現地での生活

渡航前に心配していた飲料水は、ペットボトルのミネラルウォーターを安価でいつでも買うことができたので問題なし。その他、スナックなどの軽食も村の売店で買うことができる。



〈研究の協力者の一人・アブドゥルの営む売店〉

食事をする場所は1カ所で3食ともメンバーみんなで食べる。滞在場所は2カ所に分散。ひとつは食事場所に部屋が用意されていて、主任研究者の方たちと一緒に、もうひとつは道を挟んで向かいに宿舎がある。基本的に2人部屋もしくは1人での宿泊。部屋にはベッドと枕、シーツ、蚊帳、小さな戸棚が用意さ



れている。部屋の鍵、窓の格子もしっかり準備されていて、活動時には鍵を管理人に預ける。私が使わせてもらったのは食事場所から離れた方の宿舎で、同宿のメンバーとは毎晩中庭で夜中まで話し込み、とても楽しい時間が過ごせた。また、管理人として雇われている青年、一緒に活動している学生も同じ宿舎に泊まっているので、彼らとの交流もとても楽しい時間となった。

食事はチャパティにビーンズシチュー、チャーチャが主で、時にカレーライスやパスタ、パンケーキなどが出される。メンバーのうち私を含めた教師3人組はみなアフリカ式の食事を楽しみ、毎回お腹いっぱい食べて大満足。アフリカで少しは痩せて帰ることになるかなと思っていたが、全くの誤算。街に戻ってからの食事も同行の長濱さんとわざわざアフリカ料理を食べに行く。欧米からの参加者はみな苦手なものが多かったのか、ほとんど手をつけずに食事を終えることも。



〈時には揚げた魚が出されることも〉

## (8) 交流

滞在した Gazi はイスラム文化の村。女性は肌の露出を避け、日に5回祈りの声が響く。言葉は英語が公用語で、もちろんスワヒリ語も日常的に話されている。

学校から戻った子どもたちも夕方には村で遊んでいるので、多くの時間を一緒に過ごすことができた。子どもたちは面白がってたくさんスワヒリ語を教えてくれた。2週間の滞在で簡単な挨拶と片言の会話が成り立つようになる。ケニアでは誰しもが知っている

“Jambo!” の歌も、一緒に歌っているうちに覚えてしまった。音楽を通してのふれあいも実に楽しい。



〈村の子どもたちと〉

村の人々はみな穏やかで通りすがりにあいさつを交わす。顔見知りになると人なつこく話しかけ、家族のこと、村のこと、天気のこと、家畜のことと会話が弾んで楽しい。



〈苗を植えたプロットのそばで魚を捕る子どもたち〉

歓迎のイベントとしてセレモニーやイスラム式の昼食会、家庭に招かれての夕食、学校への訪問、村の若者たちとのサッカーが企画されている。



〈フットボールを終えたルームメイトと子どもたち〉

## 5. 体験から学んだこと



### ○ 異文化のコミュニケーション

英語がほとんど話せない私にとって、今回の参加で最も不安な点はメンバーとのコミュニケーションだった。聞き取って相手の意志を大体つかむことはできても、うまく自分の意志を表現することができない。参加前にはその旨をメンバーにメールで送信し、不安に思っているも仕方がないと開き直っていた。実際に活動が始まると、ネイティブスピーカーの話すスピードに全くついて行けず、予想通り話している内容のほとんどが聞き取れない。初日のスピーチでも「言葉がほとんど分からない」と正直に伝え、その上で自己紹介をした。

しかし、日が経つにつれ耳も慣れ、活動にも慣れてくると徐々に話も弾むようになり、毎晩の部屋での会話も楽しい時間に。特に同宿のメンバーがことあるごとに話しかけてくれたこと、ゆっくりていねいに説明しながら話してくれたこと、何より、言葉以外の部分でお互いを尊重し、分かりあえたことが大きい。ふとした瞬間に、“How are your feeling?” と語りかけてくれる彼らの思いやりに何度も救われた気がする。そんな思いやりがなかったら、言葉の通じない場所にいることをたまらなく不安に思っていただろう。



〈ココナッツ・ジュースでひと休み〉

ある日、今回の参加をどう思うかと尋ねられ、「やっぱり言葉がわからないことが大きい。」と話すと、「正直にそのことを話してくれたから、私たちもあなたのことを理解できる。」とこたえてくれる仲間がそこにあり、素晴らしい友人を得られたと実感できた。



〈ルームメイトたちとの最後の夜〉

### ○ ボランティアワークの中で

研究の意図や方法についての詳細は、実際のところ分からないことがたくさんあった。特に専門的な内容については理解するのが難しい。しかし、実際にアフリカの大地でマングローブに触れ、土に触れ、生物に触れることができたことは、私にとってとても貴重な体験となった。特に、広大な土地が潮の満ち引きによって生命を育み、ひとつの生態系をかたち作っているその場所に自分が立ち、その場で感じた空気は、これから私が伝えていかなければならないことのひとつだと思う。



〈樹齢数百年というマングローブの下で雨宿り〉

### ○ 現地の人々との関わり

渡航前には特に病気と治安の面で不安があった今回の旅。市街地は別として、滞在した村では本当に温かい歓迎を受けた。行き交う人みながあいさつを交わし、穏やかに過ごす村の様子は、私が思い描いていたイメージと全く異なるものだった。村の若者たちは屈託のない笑顔で話しかけてくる。中には将来の夢を語ってく

れたものもいた。技術者になりたい、手工芸でビジネスをしたい。

そんな彼らの現実にも目を向けざるをえない瞬間もあった。仕事を持つことのできない若者も村に溢れている。貧しくて学校に行けない子どももたくさんいる。平和で穏やかな村にもそんな現実が溢れていた。



〈スポンサーがついて学校に通っている KAG の子どもたち〉

私たちに向けられる視線は温かく、誰しものが素晴らしい笑顔を見せてくれる。自分たちが抱えている問題を考えたら、私だったら半ば絶望してしまうかもしれない。でも、彼らはその日一日を素晴らしいものにしようと頑張っている。その日を生き延びるために考えている。一つひとつの出会いを大切にしている。いつも笑顔であいさつをしている。お互いを思いやっている。自分で頑張って生きようとしている。



〈家に招かれて別れを惜しむ〉

日本にいては感じることもない感覚を今回の旅で得ることができた。私がこれまでも子どもたちに伝えようとしてきた気持ち、「生きる気持ち」を、少しだけでもっと重みのあるものにできた気がした。目の前にいる村の子どもたち

は、必死で生きているんだと感じる。今まで頭の中では理解しているつもりになっていたことが、アフリカで過ごす時間の中で一気にクリアになった。そんな風に思う。

明日のために考えることも、もちろん大切だと思う。しかし、今日がよい日になるために頑張ることはもっと大切だ。その毎日がつながってよい人生が形づくられる。

最後の日、村のみんなが別れを惜しみ、でも「きっとまた会える」と笑っている。「ずっと友だちだ」と。何千キロも遠く離れた場所に、そんなことを言ってくれる友だちができた。心から感謝したい。



〈いつも笑顔の子どもたち〉

## 6. 環境教育へ

マングローブ林を守り生態系を維持することは、私たちを取り巻く地球環境にとって大変重要な問題である。そのことは日本の子どもたちにも、しっかり説明すれば恐らく理解することができる。それは、現在小学校に通う子どもたちは「環境は保護しなければならない」という価値観のもとに生まれ育ち、それが当たり前のことという感覚が彼らにとっての常識になりつつあるからだ。恐らく、授業の中でマングローブを取りあげて環境についての学習を広げ、私たちにとってのひとつの結論を導くとしたら、当然のように自然豊かな地球を守るための具体案が幾つも提案されるだろう。森林保護や、大気汚染の予防、稀少生物の保護しかり、もっと身近なゴミの問題、資源保全のためのリサイクルしかり。

しかし、遠い日本の子どもたちが考える地球



規模の現実と、アフリカの人々が抱えている生きるための現実には大きなギャップがある。地球環境にとって保護すべきマングローブ林は、現地の人々にとっての生きる術であり、切り倒して生活の糧とするものだからである。

そんな遠く離れた場所の現実と向き合い、本来の意味で環境保護を考えるならば、アフリカの人々がどうやって生きるのかということも同時に考えなければならない。これから発展しようとしている国に、先進国と同様に二酸化炭素の排出量を減らすよう求めても無理があるように、生活の糧であるマングローブをただ保護するよう彼らに求めるのは無理なのではないかと思う。

毎日の活動の中でも、建材にするためにマングローブを切り倒し、一生懸命皮を剥ぎ取って形を整えている村人の姿や、燃料にする炭の原料として切り払った枝を運ぶ姿を幾度も目にした。彼らにとってリアリティのない環境保護をいくら遠方から訴えかけても、他に生きる術のない者にそれをやめろということはできない。

村に住むある若者は仕事がないという。ある者は貧しさ故に学校を辞めたという。市街地は貧富の差がさらに激しく、街を外れた空港までの道のりは、そのほとんどがスラムだ。モンバサの街は物乞いする子どもたちで溢れている。立ち止まる人に手を差し出し、「何か食べる物をほしい」と言う。皆が必死で生きている。

今回の旅で目にしたアフリカの現実。それはほんの一部の現実でしかないけれど、それを土台にして環境教育を考えなければならないと思う。保護すべき環境を取り巻いている、現地の人々の生活にも目を向け、文化や生活様式について学び、その上で私たちが進むべき道を考える授業をつくっていかねば、ただの独りよがりな机上の空論に終わってしまう。とりわけ、問題としてとりあげている環境の周りには人間が生活し、その日を生きるために必死で頑張っているという現実を考えることこそ、本当に地球環境を守ることにつながるということを、目の前の子どもたちに伝えたい。そんな価値観をもった子どもたちが大人になり、身近な出来事を出発点に世界に目を向けるようになって

くればよいと思う。地球規模の環境について考え、生命について思いを馳せる、その裏側で、彼方に住む人々の願いを感じ、思いやることのできる、そんな子どもたちを私は育てていきたい。■

(さかいりりょうた)



〈Keep in touch ! Team 2 !!〉

-----  
\*1) 横浜市中丸小学校教諭

E-Mail : tr-sak02@edu.city.yokohama.jp

Tel : 045-491-8033

Fax : 045-491-7589

Brog: <http://kenyalover.seesaa.net/>

(体験レポートを10月末に公開予定)